

さんあることをまだ理解していないからである」(Rhet. II 10, 1389a28-29)。若者は未熟な存在である。未熟であるがゆえに時に恥を覚えるようなことをしても大目に見られるわけだが、彼らが未熟であるのは、彼らが「ノモス（法、慣習）」によって教育されているにすぎないからだと説明されている。アリストテレスは恥に関する議論の中で、「知人に対する場合と知らない人に対する場合とでは、恥ずかしいと思うものが同じなのでもない。いや、知人に対しては、真実に照らして（*πρὸς ἀλήθειαν*）恥と思われることを、見知らぬ人に対しては、ノモス（法、慣習）に照らして（*πρὸς τὸν νόμον*）恥と判断されることを、恥ずかしいと思うのである」(Rhet. II 9, 1384b24-26)と述べ、「ノモス」を「真実」と対比させている。ノモスは人々によって認められている規範であるが、若者は、人々がそうするのがよいと言っているから、ということとそれに従う。恥という感情が、誰かに見られている（あるいは見られるかもしれない）と意識することで感じるのであるから、考慮すべき価値は、人々が共有している価値判断だということになるだろう<sup>30)</sup>。先に見た「市民としての勇気」でも、その意味で勇気ある人は、当該の行為が「美しい」からというのではなく、それをしないと不名誉を被る、非難されるということをおそれる気持ちからそうするのだと考えられる。行為の動機として、それをするのが美しい、それから派生する事柄を考慮してではなく、それ自体としての美しさを認め、「それ自体のゆえに選択」できるようになることが勇気ある人には求められる。若者は、多くの人々がどう判断するかという点に目が行くが、さらにそれを超えて、他の「立派なこと」を知るような道徳的な成長が期待されている存在である一方、「性格的に欲望に走りやすい」(Rhet. II 12, 1389a3)がゆえに、それに対する抑制もまた必要であり、そのためにも恥を感じる心が若者に期待され、アイドースは若者にこそ「似つかわしい」。

他方、若者との対比で老人についてアリストテレスが言っていることは手厳しい。「また彼らは、恥じらいを感じずというよりは恥知らずである。というのは、立派なことを利益になることと同じ程度に気遣うことがないため、他人にどう思われるかはまったく気にかけないからである」(Rhet. II 11, 1390a1-3)。ここは、年配の者を中庸としてその前後に位置する青年と老人を中庸から外れた悪徳に対比させているのだろう（もっとも、年配の者についての記述はきわめて簡単なものである）。その老人観はかなり一面的であると言わざるをえないが、ここではそう考える理由に着目してみよう<sup>31)</sup>。アリストテレスは、老人は自己中心的であるがゆえに、自分の利益を優先させがちだと言う。自己利益を優先させるならば、他人

30) 他者の目を気にするとしても、誰の目を重視するかという点も重要であり、これについては後で論じる。

31) アリストテレスの老人観については、瀬口（2011）、第2章参照。

にどう思われるかは、それによって大きな不都合が生じる可能性がないかぎり、さほど重要ではないことになる。しかるに、「恥とは自分の不名誉を心に思い描くことであり、しかも不名誉から生ずる結果のためではなく、不名誉そのもののゆえに恥ずかしいと思う」(Rhet. II 6, 1384a21-22) のであるから、自己利益を第一に考える人間には無縁のものだということになる。若者は、未熟かもしれないが、「損得勘定よりも品性に従って生きる」(Rhet. II 12, 33-34) がゆえに、老人よりも恥を感じやすいということになる。

### 3-6 中庸としてのアイドース

アリストテレスは個々のパトス(情念)の分析のやり方として、3つの点に分けて考察すべきであるという。「すなわち、怒りを例にとれば、(1)どのような状態にあるとき怒るのか、また、(2)どんな人に対して怒るのが普通であるのか、また、(3)どのようなことで怒るのであるか、の三つである」(Rhet. II 1, 1378a22-24)。恥の場合も同様であるが、(2)「どんな人に対して」という要素に関しては、他の情念と比べてやや特殊である。怒りの場合、それは怒りを向ける相手であり、自分に対してあからさまな軽蔑を示すことで怒りという情念を引き起こす原因となった人物である。それに対して、誰かに対して恥ずかしいと感じる場合、その相手は、その情念の直接的な原因ではない。通常、原因となる「恥ずべきこと」は本人がやったことであり、恥を感じる相手は本人に対して直接何かをするというわけではなく、ただ存在することによって恥という情念を引き起こす。それによって本人に影響を及ぼすので、若者の教育に当たっては、直接的に働きかけなくとも、「公職者の眼前にいる(παρουσία)ということは、真のアイドースと自由人に相応しい畏れの気持ちを作り出す」(Pol. VII 12, 1331a40-b1)と考えられ、ただ訓練している若者のそばにいても十分教育効果が期待される。

そして、誰にでも恥ずかしいと思うわけではなく、「当然のことながら、恥ずかしく思うのは、自分が評価している人々に対してということになる。だが、人々が評価するのは、自分を賛美してくれる人々、自分が賛美している人々、自分が賛美されたいと願っている相手、自分が名誉を争う相手、自分がその意見を軽く見ることのないような人々、である」(Rhet. II 6, 1384a24-27)。逆に、「ひどく軽蔑している相手に対しては、人々は恥ずかしさを感じない(なぜなら、幼い子供や動物並みの人間に対して恥ずかしいと思う者は一人もいないから)」(1384b22-24)。つまり、誰に対して恥ずかしいと思うかは、本人がその人をどう評価しているか、どういう関係にあるかということによっているのである。恥を感じるのは、他人からどう見られているかを気にするからであるが、同時にまた、他人をどう見ているか、どういう関係を保っているかということの反映でもある。自分を見ている(あるいは見ているかもしれない)相手が知人であるかあるいは見知らぬ人であるか、友人であるかあ

るいはライバルであるか、といったことで、恥の感じ方も違ってくる。

『エウデモス倫理学』でアイドースが情念における中庸とされる場合には、この「誰に対して」ということがポイントとなっている。

また、アイドースは、恥知らずと引っ込み思案の間である。すなわち、どんな人の評判もいっこうに気にならない人は、恥知らずな人であるし、あらゆる人の評判を一樣に気にかける人は、引っ込み思案であるが、これに対して品位ある人とされる人たちだけの評判を気にするのがつつしみ深い人である。（EE III 7, 1233b26-30）

恥という情念に関して不足の状態にある恥知らずな人は、いかなる人の目も気につけないが、逆に超過した状態にある引っ込み思案の人は「あらゆる人」の目を気にかける。これらの不足と超過の間とされるつつしみ深い人がその目を気にする人は、単にその数が問題なのではなく、重要なのは質的なものであって、ただ「品位ある人」だけであるとされる<sup>32)</sup>。しばしば指摘されているように、アリストテレスの言う中庸は、不足と超過に対する量的な中ではない。たとえば、「節制ある人というのはしかし、快いものに関して中庸の態度をとる人である。すなわち、節制ある人は、放埒な人が最も楽しむところのものを楽しむのではなく、むしろ不快に思うのであれ、また楽しむべきでないものは総じて楽しまず、一般にどのような身体的快楽であっても激しく楽しむということはなく、そうした快楽がなくても、苦しんだり欲したりすることもないのである」（EN III 11, 1119a11-14）。それぞれ自分が置かれた状況において、何がしかるべきものであるかということ判断できることが要求されている。

中庸としてのアイドースの場合に重要なのは、誰に対して恥を感じるかということ、誰の評価を気にするかということである。もちろん、アリストテレスは「人が恥ずかしく思うのは、必然的に、悪しきことのうちでも、自分とか、自分が気遣っている者に恥ずかしいと思われることだ」（Rhet. II 6, 1383b16-18、傍点筆者）とも述べており、現実に他人の目があることが恥にとって必須だとは考えていない。しかし、たとえその場に他人がいなくとも、他人が見ていたら、と間接的に他人の目（あるいは、内面化された他者の目）を意識することがなければ恥とは言えないだろう。恥知らずは論外だとしても、誰に対しても恥を感じているのでは、主体性を喪失し、社会生活を営むのにも支障をきたしかねない。また、そうした

32) 『ニコマコス倫理学』第2巻第7章1108a31-35でも同様に中庸としてのアイドースが取り上げられているが、そこでは、「引っ込み思案の人が「何ごとにも恥ずかしさを感じる」（1108b34）と説明されているように、恥ずかしいと思う相手のことよりも、自分の行うことのうちどれだけのことを恥ずかしいと思うか、という観点から区別が為されている。

恥の感じ方では、真に適切な振る舞い方を身につけることにつながらないだろう。中庸としてのアイドースが賞賛されるのは、それが道徳的な成長に寄与するからである。

優れた職人は、たとえ普通の人なら気づかないようなミスでも、ミスを行ったことを恥じるであろう。その場合、恥は一般の人の評価を基準にしてのことではなく、優れた職人ないし目利きの評価を気にしてのことであるか、あるいは理想化された職人の目であろう。そのような感じ方は、職人の能力の向上の中で身についてくるものであろう<sup>33)</sup>。そうした特定の他者の視線を気にすると、外面を整えるだけではすまないどころか、外面だけを取りつくり方が難しく、むしろ「真実に照らして」自分が恥ずかしい仕事をしないように努力する方が容易であることにすらなるだろう。そう意識することで能力が向上するとともに、能力が向上することによって、恥を感じる相手はより限定され、より高い基準で自分を見つめ直すことができるようになるのであろう。こうしたプロセスは道徳についても想定できる。

真に徳のある人は、もはや誰かの評価を気にする必要すらないであろうが、徳の獲得の途上にある人にとって、恥という情念は、自分自身の行動について後悔を覚えさせ、将来の望ましくない行動を自重するよう促す。そうしたことを繰り返すことで道徳的に成長する可能性がある。しかし、誰の評価も同じように尊重するというのではなく、優れた人の方へ目を向けていく必要がある。自分がかくありたいと思えるような人の前では、自分がうまく振る舞えないことをより一層恥じる。道徳的な事象に関して、誰に対して恥を感じるかは、その人の道徳的なセンスの反映でもある。つまらない人のつまらない評価を気にしていたのでは、恥を感じてもそれは道徳的なセンスの向上にはつながらない。恥を感じる相手としてよりすぐれた者を選べるようになれば、自分がなすべきことについての理解も深まってきたのだと言えるだろう。

アイドースは徳ではないが、特に「節制に寄与する」(EE III 7, 1234a32)とされる。道徳的な成長に寄与する度合いを高めるためには、誰であれ他人の評価基準を考慮するというのではなく、より高い評価基準で自分を見るようになることが重要である。それには、自分のモデルとなるような人物を思い描いて行動できるようになる必要がある。思慮ある人というのは、まさにそのようなモデルとなるような人であり、そうした人の目を意識して自分の行動を省みることができるようになれば、その人は道徳的な面で大きな成長を見たと言えるだろう。もちろん、モデルによって徳を身につけようとするのは、モデルによっ

---

33) Taylor (1985), pp. 62ff. は、『リア王』第一幕でのコーディリアの振る舞いに、複雑な恥の感情を読み取っている。コーディリアは王の求めに応じて自らの愛情を姉たちのように表現することに恥を感じている。しかし、彼女は、その場の目撃者である姉のようなつまらない者の見方に同調することができない。彼女は沈黙することで、その場の目撃者に対して自分自身の立場を守ったのである。

ているかぎりにおいて、まだ徳であるとは言いがたい。「実際にそれ自体として美しく悦ばしい行為をそれ自体で悦ぶ感受性と能力をすでに養っている」が、「依然として、なぜその行為が美しく悦ばしいのか理解するには至っていない」<sup>34)</sup>ような状態であろう。

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』において、アイドースを論じた第4巻第9章の末尾で「抑制（ἐγκράτεια）」について言及し、「他方、『抑制』というのも徳ではありえず、何か混合した状態である。けれども、抑制については、後の論述で明らかにされるであろう」（1128b33-35）と述べている。抑制については第7巻で無抑制について論じられる中で取り上げられ、それがなぜ徳ではないかが説明される（EN VII 9）。抑制ある人は、悪しき欲望を持ちながらも、それが正しいことではないことを知って、それをやりたいという欲望を抑える。恥を感じる人は、悪しき（恥ずべき）欲望に従って行為してしまったことを恥じ、後悔するであろうし、未来に向けては、そのような欲望が起こっても、過去の経験からそのようなことを差し控えるよう努めるであろう。恥の気持ちがどこまで行為を制御しうるのか、それは人それぞれであり、買いかぶってはいけないただろう。無抑制の人ならば結局やってしまっただけで、また反省するかもしれないし、抑制ある人ならば、恥ずかしいことはやらないでこころと思ひ、実際にやらないかもしれない。ただし、その場合には、悪しきことをやらない理由は外部の評価に依存しているので、アリストテレスが抑制ある人の例として語っているものに比べれば、発展段階としては一段低い位置にあると言わなければならないだろう<sup>35)</sup>。しかし、他方で恥という情念は、その有り様をめぐって発展のプロセスがあり、正しさの理解を深めていく過程にもつながる。

付記 本論文は、2010年度在外研究における研究成果の一部である。

#### 参考文献

- アリストテレス（戸塚七郎訳）（1992）『政治学』（岩波文庫）、岩波書店。  
 アリストテレス（牛田徳子訳）（2001）『政治学』京都大学学術出版会。  
 アリストテレス（朴一功訳）（2002）『ニコマコス倫理学』京都大学学術出版会。  
 瀬口昌久（2011）『老年と正義 西洋古代思想における老年の哲学』名古屋大学出版会。  
 田中美知太郎（責任編集）（1979）『アリストテレス』中央公論社。  
 中畑正志（2011）『魂の変容 心的基礎概念の歴史的構成』岩波書店。  
 バーニェト M・F（神崎繁訳）（1986）「アリストテレスと善き人への学び」井上忠・山本巍編訳『ギリシア哲学の最前線Ⅱ』東京大学出版会、86-132ページ。

34) バーニェト（1986）、103ページ。

35) Curzer (2012), p. 353 は、道徳的発達を図式化し、アイドースが働くのは、generous-mind の段階から incontinent の段階へと移行する過程においてだとしている。

- 廣川洋一 (2000) 『古代感情論 プラトンからストア派まで』 岩波書店。
- プラトン (藤沢令夫訳) (1979) 『国家』 (岩波文庫), 岩波書店。
- プラトン (森進一・池田美恵・加来彰俊訳) (1993) 『法律』 (岩波文庫), 岩波書店。
- プラトン (納富信留訳) (2012) 『ソクラテスの弁明』 (光文社古典新訳文庫), 光文社。
- ヘーシオドス (松平千秋訳) (1986) 『仕事と日』 (岩波文庫), 岩波書店。
- Burnet, J. (1900), *The Ethics of Aristotle*, London: Methuen & Co.
- Cairns, D. (1993), *Aidôs: The Psychology and Ethics of Honour and Shame in Ancient Greek Literature*, Oxford: Oxford University Press.
- Curzer, H. J. (2012), *Aristotle & the Virtues*, Oxford: Oxford University Press.
- Denyer, N. (2008), *Plato, Protagoras*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Dirlmeier, F. (1956) *Aristoteles, Nikomachische Ethik (Aristoteles Werke 6)*, Berlin: Akademie Verlag.
- Irwin, T. (1999), *Aristotle, Nicomachean Ethics*, 2<sup>nd</sup> ed. Indianapolis: Hackett Publishing Company.
- Kerferd, G. B. (1953), "Protagoras' Doctrine of Justice and Virtue in the *Protagoras* of Plato," *Journal of Hellenic Studies* 73, pp. 42-45.
- Konstan, D. (2006), *The Emotions of the Ancient Greeks: Studies in Aristotle and Classical Literature*, Toronto: University of Toronto Press.
- Taylor, G. (1985), *Pride, Shame, and Guilt*, Oxford: Oxford University Press.
- West, M. L. (1978), *Hesiod, Works and Days*, Oxford: Oxford University Press.